

育児における父親の役割に関する研究

—総括報告—

総括報告者 川井 尚¹⁾
研究者 川井 尚¹⁾, 庄司 順一²⁾, 横井 茂夫²⁾, 若麻績佳樹²⁾
西林 洋平³⁾, 大村 勉³⁾, 大藪 泰⁴⁾, 恒次 欽也⁵⁾
森田 英雄⁶⁾, 倉繁 隆信⁶⁾, 浜田 文彦⁶⁾, 山本 皓二⁷⁾
北園 康弘⁷⁾, 斉藤 晃⁸⁾, 吉田 弘道⁹⁾

要旨：父親は子どもの心身の発達や健康に関していかなる役割をもっているのか、母親のそれに比べてその知見はきわめて乏しい。父親は、子どものいつの時期に—例えば妊娠期からか、幼児期か—登場し、現実のいかなる育児行動を示し、それがどのような効果を子どもに与えるか。一方、従来、育児の主たる担い手であった母親が、父親の育児に対していかに期待し評価するかも、子どもへの影響という点で無視し得ない問題である。また、心身障害児、病児、情緒・行動的問題児の父親の果たすべき役割について、保健指導等に役立つ知見を得ることも、本研究の重要な課題である。父親の育児における役割を明らかにしながら母親の役割とうまく調和し、家庭の養育機能を高めるための方法を、3年間で提案できればと考えている。

そこで、本研究2年度では、初年度の研究をふまえて、下記の検討を行なった。

- 1) 妊娠期からの父親育児参加に関する検討
- 2) 乳児期の父親の育児行動の実態
- 3) 父親の育児協力度が母親の育児に及ぼす影響
- 4) 父親像の心理学的研究
- 5) 心身障害児の父親の育児意識に関する研究—母親との比較検討—
- 6) 障害児、入院病児の父親相談参加、面会に関する検討—児に対する影響についての事例研究—

見出し語：育児と父親、父親の育児行動、父親像、父親行動と母親の育児、心身障害児の父親、入院病児・相談過程における父親の役割

- 1) 東京都精神医学総合研究所
- 2) 都立母子保健院
- 3) 松山赤十字病院
- 4) 長野大学
- 5) 愛知教育大学
- 6) 高知医科大学
- 7) 高知医科大学情報センター
- 8) 鶴見大学女子短期大学
- 9) こどもの城

研究の方法：

本研究の目的を果たすためには、学際的な研究が必要である。そこで、産婦人科医、小児科医、心理職からなる研究班を編成し、それぞれのフィールドにおいて調査を行なう一方、調査票の作成と得られたデータの分析について議論を重ね、研究をすすめた。

研究成績の概要：

1. 父親の育児参加に関する基礎的研究

担当：若麻績佳樹、庄司順一、川井 尚

父親がいつの時期から育児に参加することが妥当であるか、未だ結論は得られていない。しかし、父親意識を喚起し、その育児行動を動機づけるという積極的な働きかけの方法として、両親学級をあげることができよう。そこで両親学級開設のための基礎資料を、妊婦とその夫を対象に収集した。

その結果を要約すると、

- ①父親が子どもと関わりはじめる時期について、妊婦の93.3%が妊娠中からの関わりを求め、一方夫は生まれてからでよいとするものが40.7%と大きな差を見せている。
- ②夫の立ち会い分娩への希望は、妊婦ではあり・なし・どちらともいえないが各々1/3である。しかし、夫自身は1/4のみ立ち会いを希望している。
- ③両親学級への参加について、妊婦・夫とも60%が希望しており、特に初回妊娠の人に多い傾向がみられた。
- ④夫の家事・育児行動について、妊婦は夫に対し家事よりも育児行動を期待し、一方夫は育児

よりも家事行動を希望し、ここにも両者の差がみられた。

本年度は、これらの資料をもとに両親学級を開設しその効果の検討を加えたい。

2. 母親による父親行動の評価と母親の養育態度に関する研究

担当：大藪 泰

4か月、10か月、1歳半児をもつ母親に対し、その父親がどのような養育行動をしているかの実態を調査した。その結果、父親の養育行動として最も出現しやすいのは「抱いてあやす」「入浴させる」「遊び相手になる」であり、家事行動では「ゴミを出す」「日常の買物」「修理」である。また、兄姉のいる家庭の父親はいないものよりも家事をよくしている傾向がある。

今後、このような父親の行動の母親による評価を調べ、母親の養育態度に影響を与える要因について検討を加えたい。

3. 父親の育児に対する協力度と母親の育児観

担当：森田英雄、浜田文彦、倉繁隆信

山本皓二、北添康弘

父親の育児に対する協力度の母親の育児観への影響について、1962年（1005例）と1989年（1747例）のデータを分析検討した。

- ①母親によって評価された父親の協力度について、協力度は1962年52.1%、1989年49%、とほぼかわりないが、非協力的は4.5%から9.4%にふえている点が気になる。
- ②協力度と父母の話し合いとの関連は、育児に協力的であるほど、父親は母親とよく話し合い

の機会をもっている。

③父親が育児に協力的でない、母親は育児に自信がなく、楽しくないとするものが多かった。また、夫が育児について協力的であっても、育児が楽しいと思う母親が1962年の85.4%から1989年40.2%と激減し、このことは父親の協力にかかわりなく、自由な時間のないことを不満とする母親が50%近くいることとも関連しているかもしれない今後検討すべき重要な課題である。

4. 父親の意識に関する基礎的研究

担当：斉藤 晃

表象は、現実のある態度や行動を形成・遂行することに大きな役割を有している。そこで、父親のもつ理想的な父親像・現実的な父親像と、母親の抱く理想的なおよび現実的な父親像を明らかにすることは、育児における父親の役割の解明の手掛かりになると考えられる。今回、調査データを因子分析した結果を要約すると、

①父親の抱く理想的な父親像とは、父親として強くありたいと願い、子どもの教育への熱心さを示しながら、しかししつけに対しては回避的である。

②父親の抱く現実的父親像とは、家庭において強い父親で権威をもち、妻とは心理的距離をもって接し、男の子のしつけは父親がすべきであると、その役割を意識している。

このように、強い、権威をもつ父親像は、理想と現実像で一致しているが、一方ギャップもみられこれが父親の育児行動にいかなる影響を与えるか、今後検討を加えたい。

5. 発達障害児の父親・母親における家族観について

担当：横井茂夫

発達障害児をもつ父親・母親を対象に家族・家庭観に関するアンケート調査を行なった。その結果、母親に比べ父親の方が家族・家庭を肯定的に評価していることが認められた。しかしこれと矛盾して、仕事のために家庭をおろそかにしても仕方がないとする父親も多く、現実の育児や母親へのサポートに影響がでることも考えられる。また、心身不調を訴える母親が多く、それだけに父親の育児参加、母親へのサポートが重要であると考えられた。

6. 障害児をもつ子どもの父親の育児意識（その2）

担当：恒次欽也

障害をもつ子どもを母親が一人で背負い育てることは困難であるし、児の発達にも影響があることは容易に推測できる。そこで、父親も母親と共に育児に当たることが重要であると考えられ、父親は自己評価をし、母親には父親の態度についての評価を求めることにより、父親行動の問題点を検討した。

その結果を要約すると、

①父親の自己養育態度評価と、母親による父親評価はおおよそ一致している。

②「母親の子育て」についての見解は、不一致であり、母親自身は子育てとは「身の回りの世話」であり、一方父親は母親の役割を「しつけ」であると考えている。

③「子育ての目標」での不一致は、父親は健康

第一、幸せであるように、一方母親は健康だけでなく、子どもと楽しくかつよく理解したいと思っている。

④「子どもとの接触の程度」について、父親がやっているほどには母親がその程度を評価していない。

⑤「積極的に相手をする理由」は、父親にとっては子どもに何か教えたい、子どもが好き、そして心配がそれぞれ23～28%であるのに対し、母親は父親がそうするのは心配だからであろうとしている。

⑥「子どもの相手をすることに消極的」なのは、母親からみると父親が子どもに関心をもっていないからだ、と19.3%の人が思っている。しかし、父親はそうではなく、消極的なのは妻に任せたいほうがよい、仕事が忙しいなどの理由からである。

⑦「父親像」について、父親自身は口うるさい、甘いと評価し、母親は父親が自分自身を評価している以上に頼りになると評価している。

⑧父親は、疲れて不健康、意欲的でなく、楽しくないという自己像をもち、一方母親は元気で潑刺とした自己像を示している。

⑨子どもの状態については、父母の一致性は高い。よく子どもについて話し合っているようである。

⑩相談相手は夫婦互いを選んでいる。しかし、全体で6.8%の人は相談相手がなく、この点は問題であろうし、また自分達以外の相談相手の対象が違うこと、そして何よりも父親の相談相手が少ないことに注目される。

7. 疾患を持つ子供に対する父親の役割に関する研究

担当：西林洋平、大村 勉

小児病棟に3回以上入院した小児の父親面会率を調べ、その結果

①平均面会率は、72.6%、外科疾患、血液、悪性疾患および未熟児、新生児の面会率は、他疾患に比べ有意に低率であった。

②病期による面会頻度には、一定の傾向はみられなかった。

③外科疾患では、8日以上入院児の面会率が有意に低率であった。

④面会率に影響を与える要因として、感染症ではきょうだい順位、きょうだい数、祖父母との同居の有無、外科疾患では祖父母の同居の有無があげられた。

今後、この基礎資料を基に父親の面会行動を起す要因やその意識を調査し、児や家族への影響を検討したい。

8. 小児科クリニックでの療育・相談過程における父親の役割に関する研究

担当：吉田弘道

従来、小児科診療や子どもの相談に父親が参加することは稀であったし、親や専門家にとっても重要なこととは思われてこなかった。父親が診療や相談に参加し、果たすべき役割があるかどうか、まずその実態を調査すると共にその効果についての事例検討を行なった。その結果
①延べ相談回数当たりの父親参加率は16%、しかし日曜日では37%であり週日の11%を大きく上まっている。まず、父親の相談参加を促すに

は、土日の診療・相談を行なう必要がある。

②父親の約2/3は、積極的に子どもとかかわっており、母親もそう評価している。

③約2/3の夫婦、互いをよき理解者、協力者として評価し、子どものことで助け合っている。

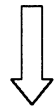
④一方、仕事の忙しさ、自分の興味、或いは子どもへの対応がわからないことが理由に、子どもと積極的にかかわろうとしない父親がいる。父親の育児協力を不満を持つ母親も、半数はいることは見逃せない。

⑤相談過程に父親が積極的に参加し、両親関係が良好であると、子どもの発達や情緒・行動的問題でのよい変化が生じやすい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要旨:父親は子どもの心身の発達や健康に関していかなる役割をもっているのか、母親のそれに比べてその知見はきわめて乏しい。父親は、子どものいつの時期に - 例えば妊娠期からか、幼児期か - 登場し、現実のいかなる育児行動を示し、それがどのような効果を子どもに与えるか。一方、従来、育児の主たる担い手であった母親が、父親の育児に対していかに期待し評価するかも、子どもへの影響という点で無視し得ない問題である。また、心身障害児、病児、情緒・行動的問題児の父親の果たすべき役割について、保健指導等に役立つ知見を得ることも、本研究の重要な課題である。父親の育児における役割を明らかにしながら母親の役割とうまく調和し、家庭の養育機能を高めるための方途を、3年間で提案できればと考えている。

そこで、本研究2年度では、初年度の研究をふまえて、下記の検討を行なった。

- 1) 妊娠期からの父親育児参加に関する検討
- 2) 乳児期の父親の育児行動の実態
- 3) 父親の育児協力度が母親の育児に及ぼす影響
- 4) 父親像の心理学的研究
- 5) 心身障害児の父親の育児意識に関する研究 - 母親との比較検討 -
- 6) 障害児、入院病児の父親相談参加、面会に関する検討 - 児に対する影響についての事例研究 -